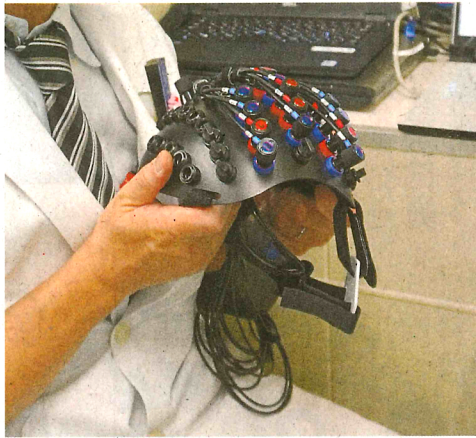


三原雅史教授



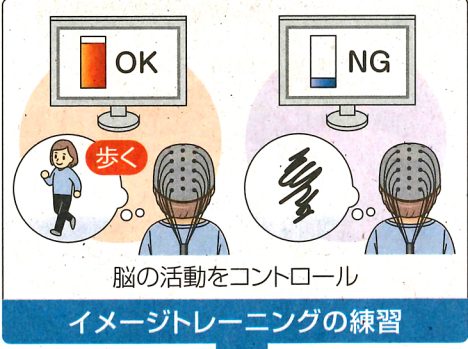
川崎医科大(倉敷市松島)の三原雅史教授(神経リハビリテーション)らのグループは、脳卒中のリハビリテーション効果を高める医療機器の開発を進めている。患者は脳の血流量を測定するヘルメット式の装置をかぶり、歩く姿をイメージトレーニング。血流量の増加を確認しながら繰り返すことで、脳を意識的に活性化でき、リハビリ単独よりも効果が

イメージトレーニング 脳卒中リハビリに効果



脳の活動具合を確認するためのヘルメット式装置

実用化を目指す医療機器を用いたリハビリテーションのイメージ



歩行機能が改善

010年に機器の開発に着手した。患者は近赤外光による血流測定装置をかぶり、自身が歩く姿を5分間イメージ。脳が働き、血流量が増加した状態を「棒グラフ」に変換してパソコン画面に表示する。グループのこれまでの研究では、脳の活動が活発になると期待される。三原教授は「言語障害などのほかの後遺症や、パーキンソン病といった別の病気にも応用できる可能性がある。今後4年以内の実用化を目指したい」としている。

川崎医科大・三原教授ら 機器実用化目指す

得られるという。近くなどの総称。国の調査では全国で年間約30万人が新たに発症が多く、社会復帰には、推計患者数は約1リハビリが欠かせない。脳卒中は血管が詰まる「脳梗塞」と血管が破れる「脳出血」り、助かっても手足の機能が回復す

得られるという。近くなどの総称。国の調査では全国で年間約30万人が新たに発症が多く、社会復帰には、推計患者数は約1リハビリが欠かせない。脳卒中は血管が詰まる「脳梗塞」と血管が破れる「脳出血」り、助かっても手足の機能が回復す

得られるという。近くなどの総称。国の調査では全国で年間約30万人が新たに発症が多く、社会復帰には、推計患者数は約1リハビリが欠かせない。脳卒中は血管が詰まる「脳梗塞」と血管が破れる「脳出血」り、助かっても手足の機能が回復す

(伊丹友香)